

CONCEPT BOOK/NEXTMARUNI

# CHAIRS

# 目次

はじめに

建築とは

気配と間

間の建築

連続性

部屋と間

椅子

テーブル

パーティション

3つのレベル

椅子の定義

商品体系

コーディネート

雑貨という海

身体感覚

6つの思想

# 始めに

この冊子はネクストマルニの考える「人と生活と家具の思想」を絵と言葉で描いたものです。

ネクストマルニはその考えを「商品でもあり、作品でもうある椅子というかたち」で表現しようと考えています。  
多くのデザイナー達の力を借りて、長い年月を掛けて1つずつ実現していきます。

日本には家具の歴史がありません。歴史のない日本で、ネクストマルニは「日本の美意識へのメッセージとしての椅子」のデザインを世界のデザイナーにお願いすることで「日本的ではない世界に通用する日本発の椅子」をつくっていかうと考えました。

この冊子は、ネクストマルニの思想の背後にある、「棲むところとはなにか」、「椅子とはなにか」、「テーブルとは何か」、「空間とは、そして、日本の間とはなにか」などを考え、「人間と家具の関係」を考えながら商品＝作品をつくりあげていきたいと整理したものです。

生活者と販売する人々とつくる人たちとデザイナー達が1つになってこの思想を広げていきたいと考え、この冊子を制作しました。

ネクストマルニ委員会

## 建築とは……ところがやすまり、ホッとするとこ

家とか建築とか、棲むところとはなにか、それは先ず「心がやすまり、ホッとするとこ」だと思います。

「はきものを脱ぎ、素足ですごすところ」といってもいい、何も不安がなく落ち着くところです。

1つの例を考えまてみましょう。

旅人が荒野を旅していて、日が沈みかかり、寝るところを探しているとしましょう。旅人はだだっぴろい荒野で寝る場所、その手がかりを探すに違いありません。どこでも寝られるのにどこでもそれができないのです。

洞窟があれば旅人はそれを選ぶでしょう。こんなに安心なところはないからです。でも洞窟がなくても一本の枯れ木があれば、そこに宿を決めるでしょう。枯れ木に寄りかかり十分ではないけれど「どこかホッとして」休むでしょう。

洞窟は身体全部を守ってくれる覆いです。枯れ木は身体は覆ってくれないけれど心のよりどころをくれるのです。洞窟は「覆う建築」であり、枯れ木は「気配の建築」です。覆う建築は身体を守り、気配の建築は心を守る建築です。

建築にはこの2つの原点があるのです。

そして、洞窟の建築は石や煉瓦による壁構造の西洋の建築の、気配の建築は日本の木造の建築の源流だといえます。



洞窟の建築は女性性器の室や子宮に、柱の建築は男性性器に似ています。室はペニスを包み、子宮は胎児を包んで育てますが、ペニスはシンボリックに力や生命を誇示しても決して包み守ってはくれません。洞窟の建築は母親に似ています、柱の建築は父親にそっくりです。暖かく包む愛情は母のもの、むち打ち厳しい愛は父のものですから。

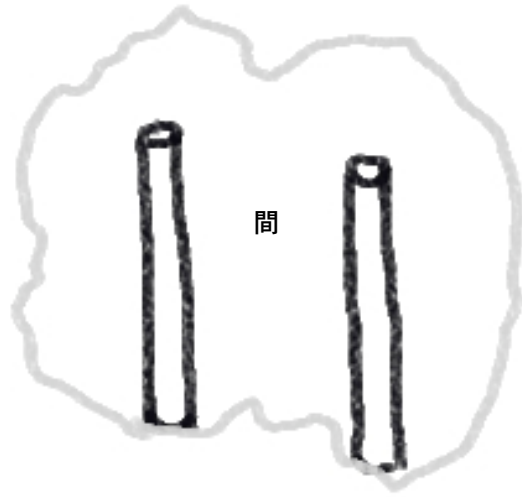
## 気配と間……気配が間をつくる

一本の柱があればそのまわりに柱の気配できるのです。「気迫のある人」とは強い人が放つ気配ですし、「色香の漂う女性」とは女らしさという気配をまわりに放つ女性です。人のまわりに気配が生まれるように、柱のまわりにも柱の気配がうまれるのです。日本人はこの気配に敏感です。「気配」とは「気」なのですが、日本語にはこんなに多くの「気」を用いた言葉があります。

「その気にさせる」、「気がある」、「気が合う」、「気がいい」、「気が多い」、「気が大きい」、「気が置けない」、「気が重い」、「気が勝つ」、「気が利く」、「気が無い」、「気が腐る」、「気が差す」、「気が知れない」、「気が進まない」、「気が済む」、「気がする」、「気が急ぐ」、「気がそれる」、「気が立つ」、「気が小さい」、「気が散る」、「気が尽きる」、「気が付く」、「気が詰まる」、「気が遠くなる」、「気が咎める」、「気が無い」、「気が長い」、「気が抜ける」、「気が乗る」、「気が早い」、「気が張る」、「気が晴れる」、「気が引ける」、「気が触れる」、「気が減る」、「気が紛れる」、「気が回る」、「気が短い」、「気が向く」、「気がもめる」、「気が若い」、「気にかかる」、「気に入る」、「気に掛ける」、「気に食わない」、「気に障る」、「気にする」、「気に留める」、「気になる」、「気に病む」、「気の所為」、「気の病」、「気は心」、「気を入れる」、「気を失う」、「気を落とす」、「気兼ねする」、「気をきかせる」、「気を砕く」、「気を配る」、「気を尽くす」、「気をつける」、「気を取られる」、「気を取り直す」、「気を抜く」、「気を吞まれる」、「気を吐く」、「気を張る」、「気を引く」、「気を回す」、「気を持たせる」、「気を揉む」、「気を許す」、「気を良くする」

一本の柱のまわりに生まれた気配に心の安らぎを見いだすのが日本の建築の出発点だったのです。

複数の柱が気配を放ち、その気配と気配が1つとなって「間」を形成するのです。

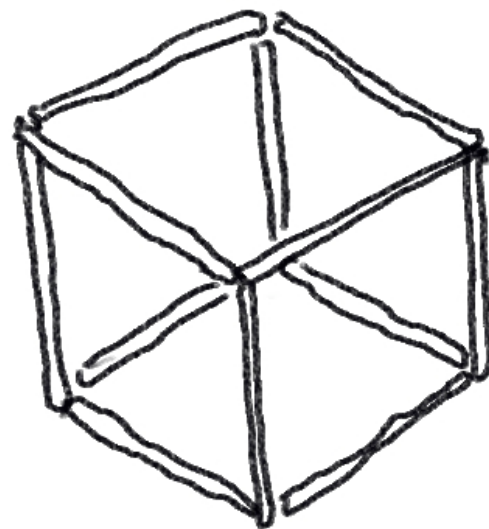
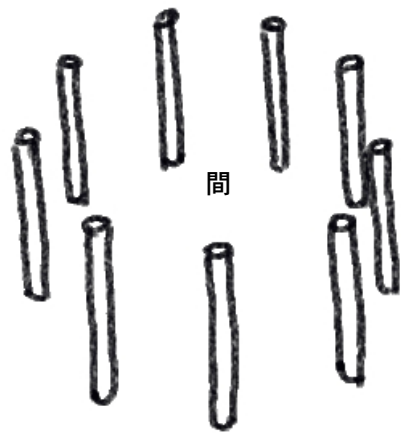


## 間の建築……日本の建築

「気配の建築」である「柱」は複数、集まると「覆う建築」に似てきます。複数の柱の気配と気配がつながって「間」をつくりあげるのです。

日本の建築はこうして木造の柱が集まって形成する「間」の生みだす空間だったのです。

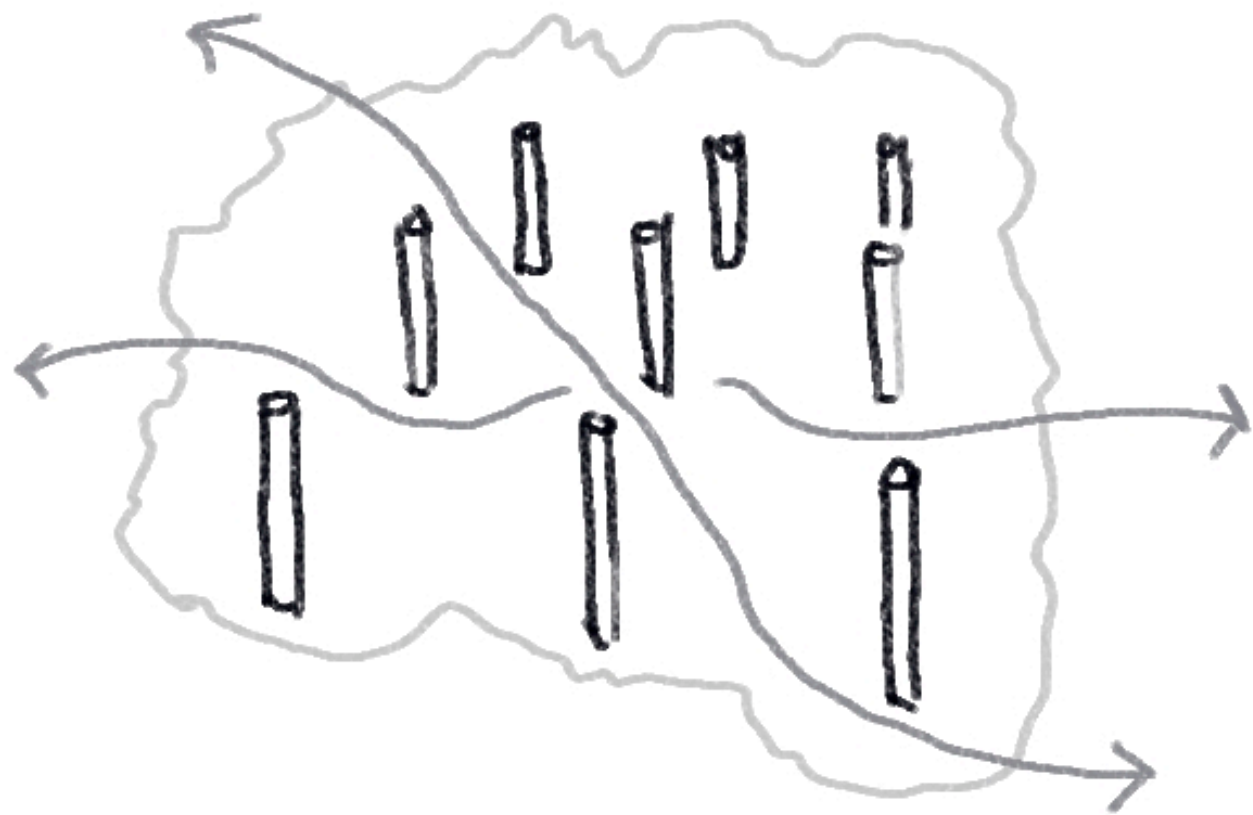
西洋の建築のように「覆う建築」では得られない「間」の建築だったのです。



## 連続性……外も内も1つ

複数の柱の気配とそのつくりあげる間としての日本建築の建築の空間は「覆う建築」のように外周壁がありません。気配の集合は屋内と屋外に連続性をもたらします。

壁でできた「覆う建築」である西洋の建築では屋内と屋外は峻別されています。そして、その壁に窓を穿つのですが、日本建築の「気配の建築」では柱が生みだす気配だけがあって、始めから壁はなく、したがって窓もありません。内部と外部の意識もなく数奇屋では庭も又数奇屋だと考えていたのです。すだれや明かり障子などで内外を微かに変質させるに過ぎません。



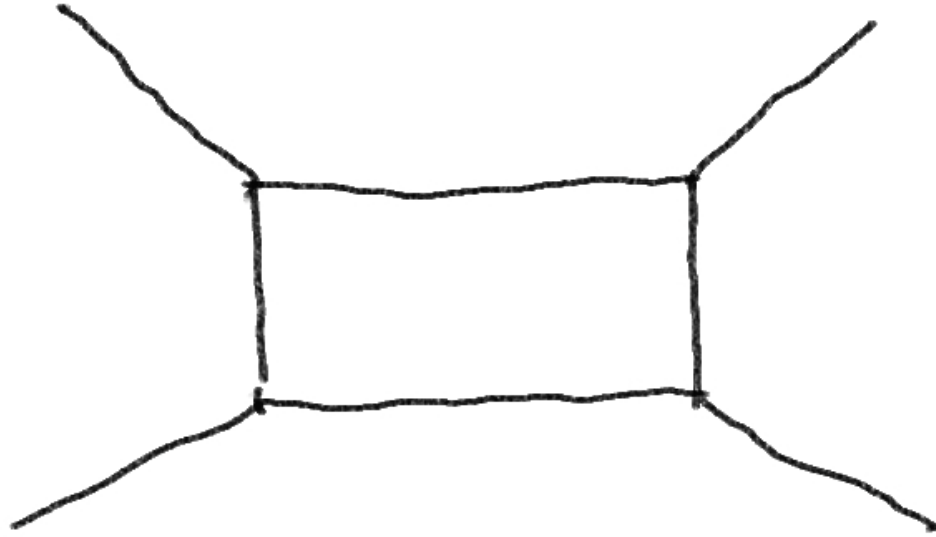
## 部屋と間……間は豊穡な空間

覆う建築には壁に囲まれた内部空間があります。外部からただ囲み取っただけですから内部空間の質は本質的には外部と変わりません。切り取られた内部空間は部屋といいますが、日本の建築には部屋というものがありませんでした。全てが気配でできていて、内外が連続的であるのは柱と柱の気配が生み出した「間」だったからです。

日本の家に「居間」とか「寝間」とか「客間」とか「茶の間」という名前が付けられたのもこの「間」という感覚があったからです。

部屋は英語で「ROOM」です、これはからっぽという意味をもっています。「ルーム」とは空いたところであって詰まったところではないのです。それに対して「間」にはいっぱいの気配が詰まっています。

襖や明かり障子で仮に区切られただけの連続的なつながり、そこに敷かれた畳の上では家具なしですごすことができます。布団を敷けば寝間に、座布団を敷けば客間に変化する家具のない室内です。履物を脱いで入る日本の家屋は、それはそれ自体が大きな家具だったとすることができるのです。日本建築の室内はがらんどうではない、いっぱい詰まった充実した空間だったのです。



西洋の部屋



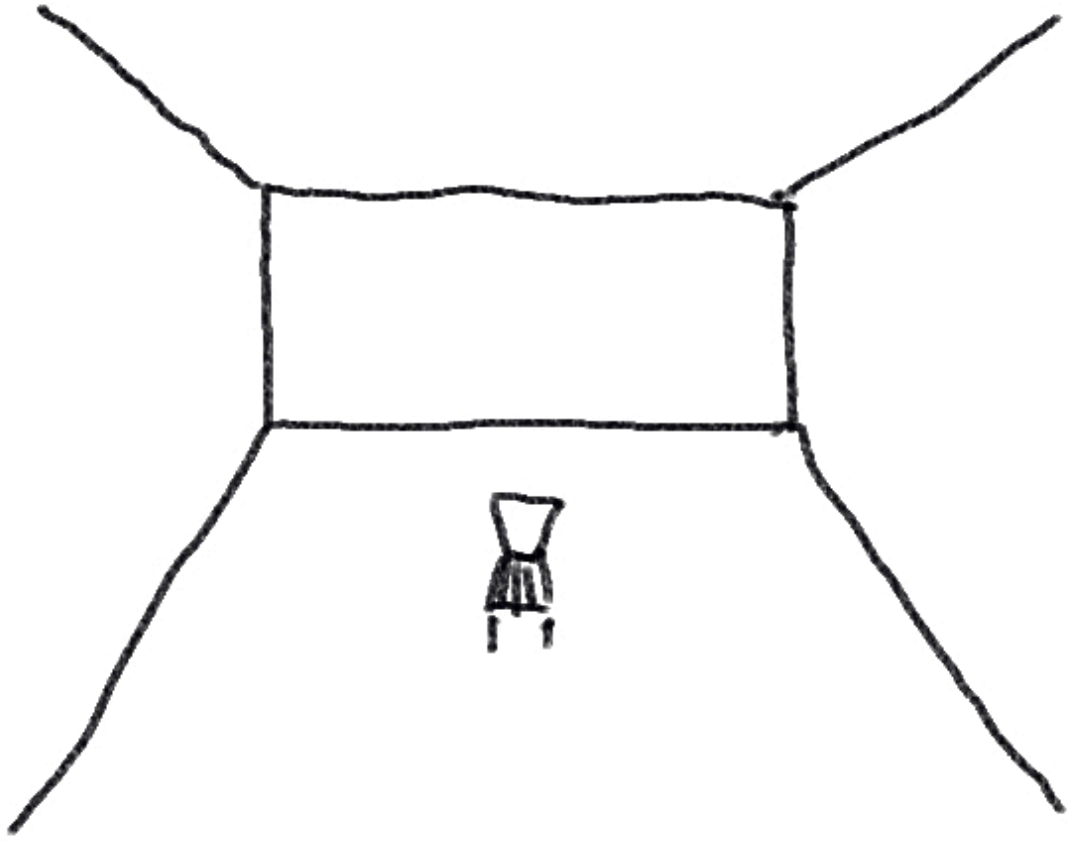
日本の間

## 椅子……安心してほっとする空間

がらんだ西洋の部屋でも家具があれば居場所ができます。安心してほっとすることが出来るのです。

椅子は荒野の旅人が見つけた一本の枯れ木のようにそこに宿を取る事の出来る落ち着いた、居心地のいい空間をつくれます。椅子は気配の建築だったのです

日本の家がそれ自体、家具であり椅子だったように、椅子も又、気配の建築であり、日本の家と同じだったのです。

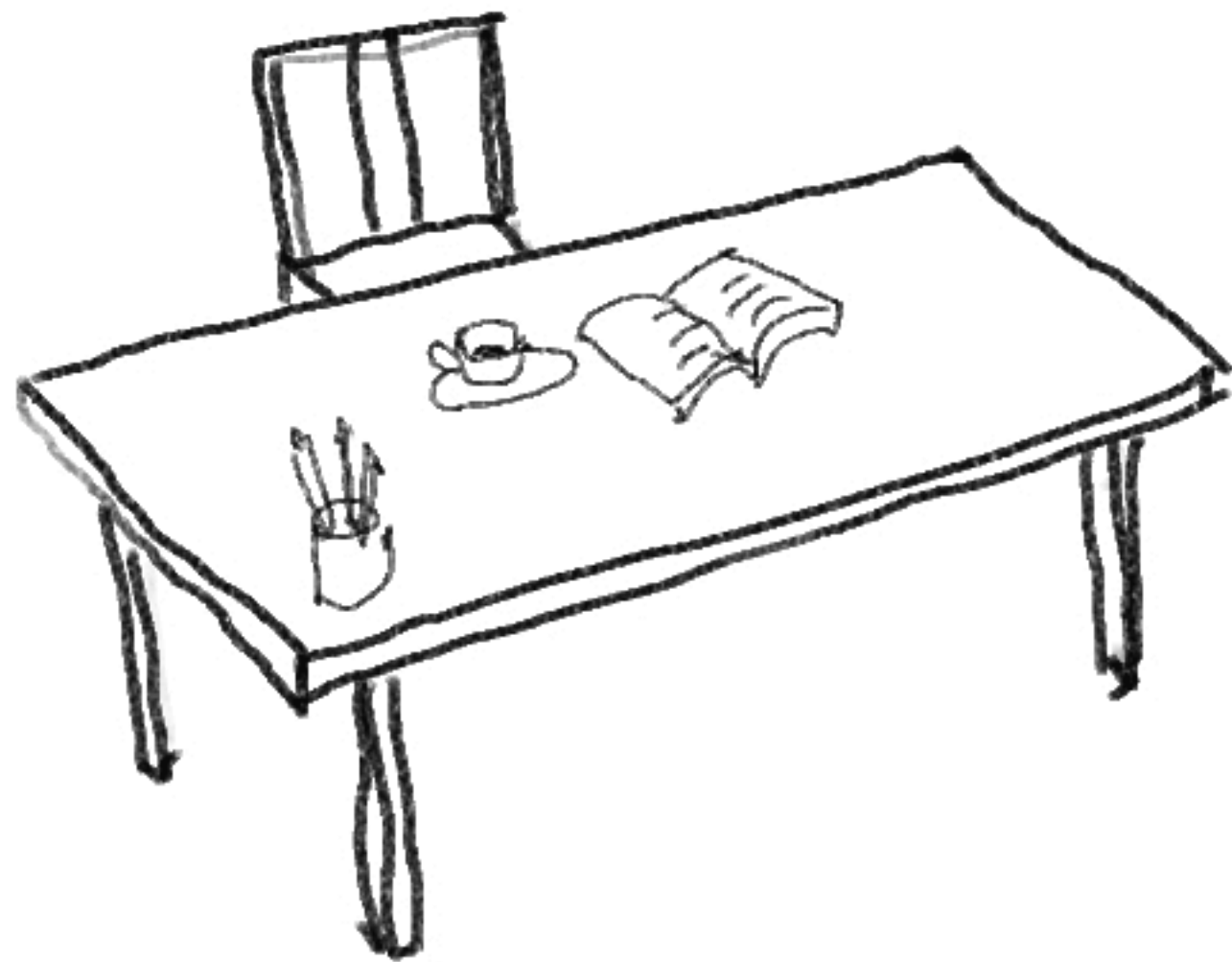


## テーブル……生活が始まる切っ掛け

がらんだらった部屋に椅子を置くことでやっと落ち着くことのできた人は、そのままではまだ何か不足を感じる筈です。安心は出来ても何も始まらないからです。

椅子の前に小さくてもテーブルがあれば、人はメガネを置き、灰皿を置き、本を置き、コーヒーを置いて生活が始まるのです。何かを思索し、人と会話をし、メモをとって人が人らしく内面的な生活も始まります。

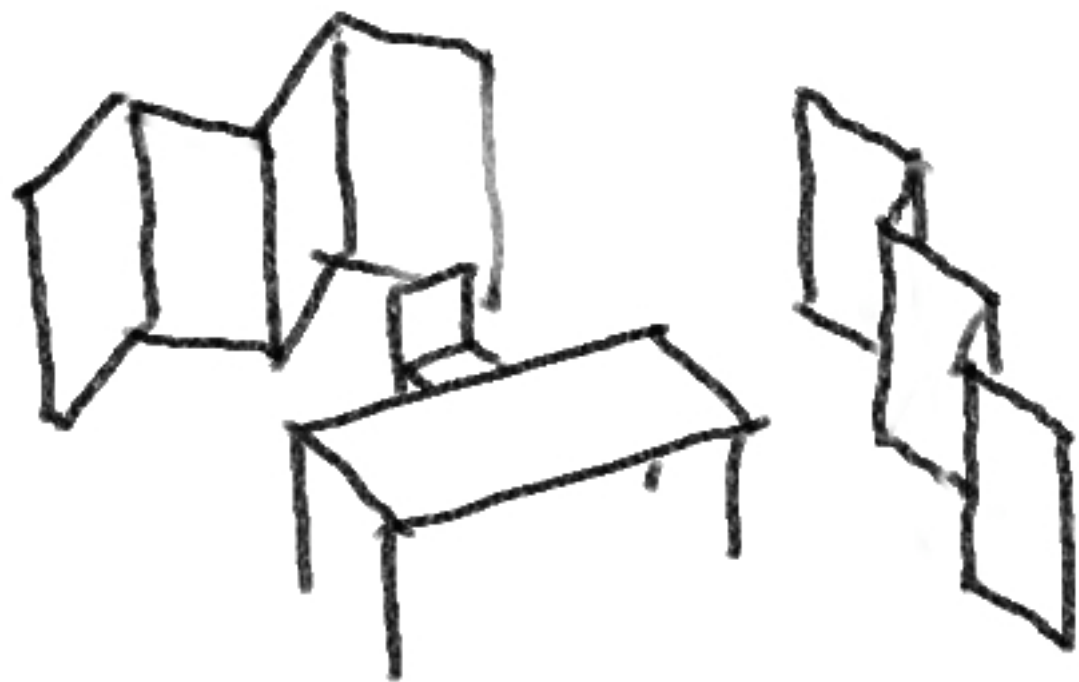
椅子は安心をつくり、テーブルは生活を始めさせてくれるのです。



## パーティション……間合いの道具

パーティションは日本の建築では襖や屏風と同じです。永久的ではなく仮に空間を仕切って「間」を生み出す道具です。日本の建築が室内も室外も連続した1つの間だったように、西洋の部屋をこのパーティションが間の空間に変えてくれるのです「椅子がつくる安心」と「テーブルが生み出す生活の始まり」と、それでも落ち着かない空間の広がりや適度に制限し、「間をつくるパーティション」が揃って初めて生活空間がうまれるのです。

ネクストマルニはく椅子を中心にして、テーブルとパーティションを「生活空間をつくる道具」として製品化していきます。ここではもう家具という概念は不要です。



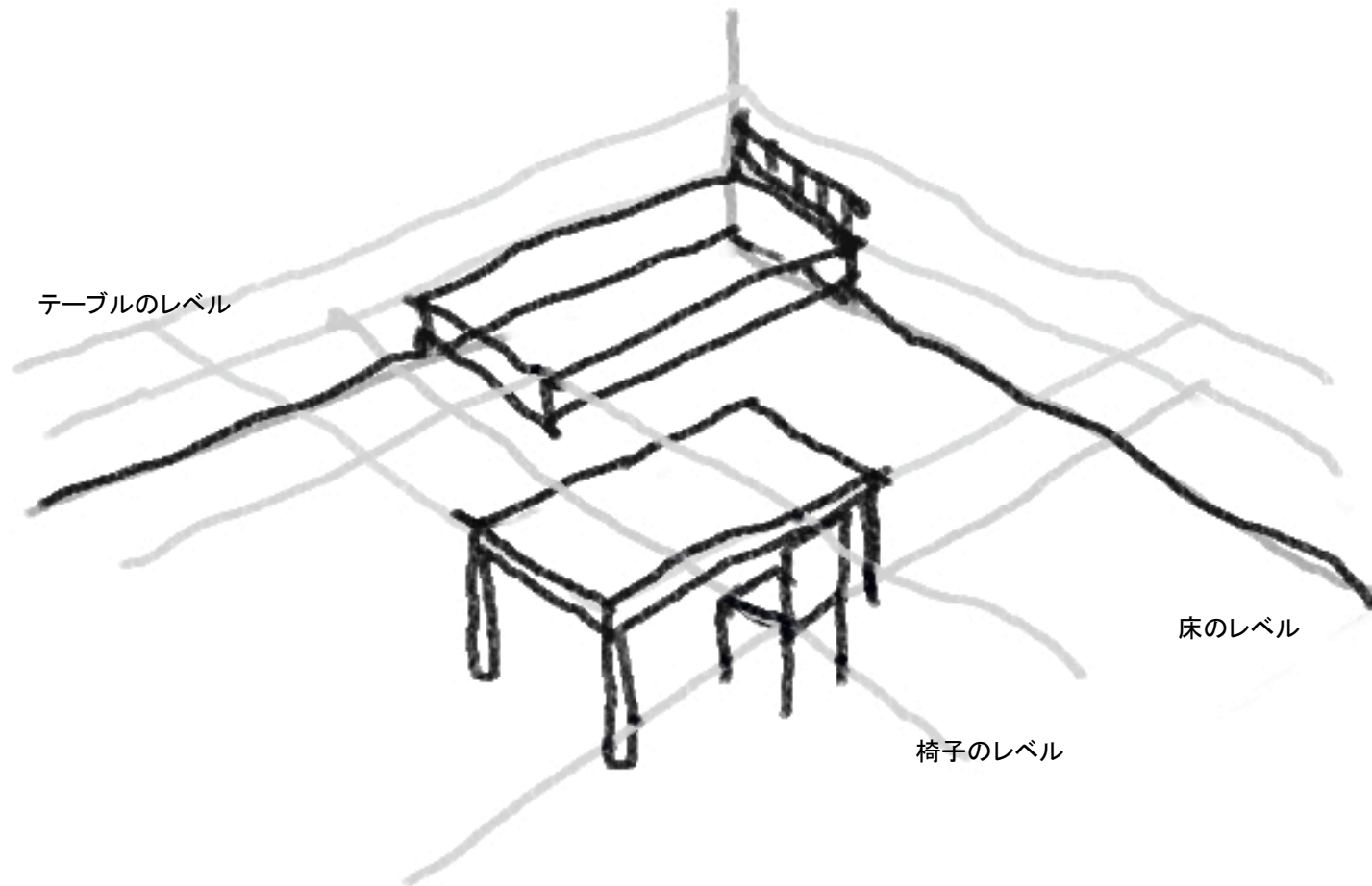
## 3つのレベル……床と椅子とテーブル

人々の生活を観察すると、三つのレベルが発見できます。それは床のレベルと椅子のレベルとテーブルのレベルです。「床は人間の存在を支え」、「椅子は心を支え」、「テーブルは生活を支え」ます。

床がなければ人は存在し得ません、それが出発点。その上に生活する人々は自分の姿勢を様々な支える支持具を求めます。もたれる壁、ちょっと腰をかけるバーチェア、姿勢をだだして座る小椅子、コーヒーをのんびり会議をする、ちょっと緊張もあるアームチェア。リラックスする姿勢の、ラウンジチェアはお酒を飲んだり談笑したりする椅子です。こうして様々な人の気分を支える椅子があるのです。

ネクストマルニはその上にディチベッドやベッドもその仲間にいれて考えています。名前はベッドですがその心は椅子と同じです。

テーブルのレベルは物を置いたり作業したりするレベルです。これがあるからものが存在する場所を得て物と係わって人は生活を始めます。椅子を最重要視するネクストマルニはそれをサポートする、生活へつながる大切な部品としてテーブルを開発します。



テーブルのレベル

椅子のレベル

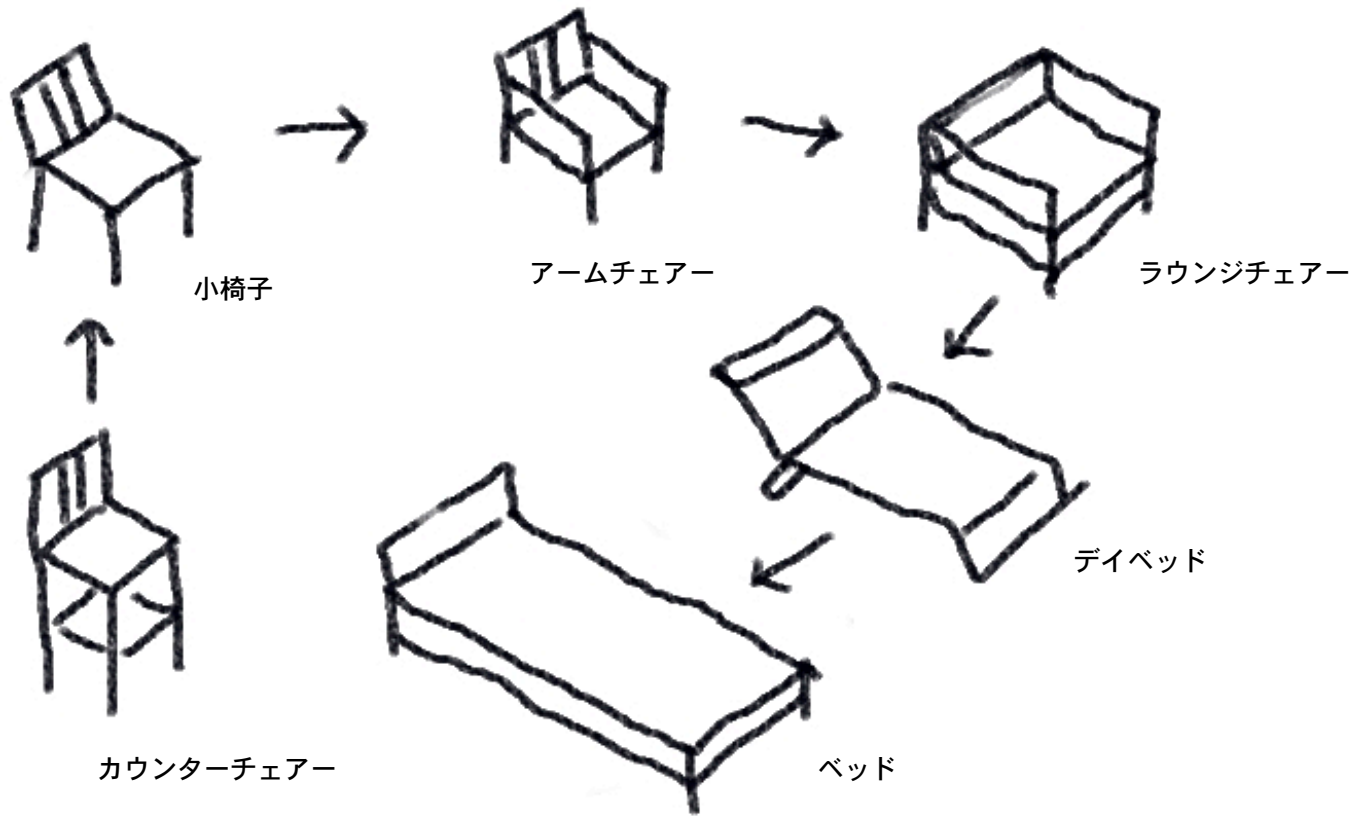
床のレベル

## 椅子の定義……姿勢を支える道具

人は様々な姿で身体を休めます。その姿態を支えるのが椅子です。人間には歩から臥への様々な姿態があります。

椅子とはネクストマルニでは人の姿勢を支え、人の心を安心させるものと考えています。立つから寝るまでの全てを含みます。

その人の姿勢に対応していろいろな椅子が生まれたのです。そして、ベッドもその椅子の仲間になったのです。

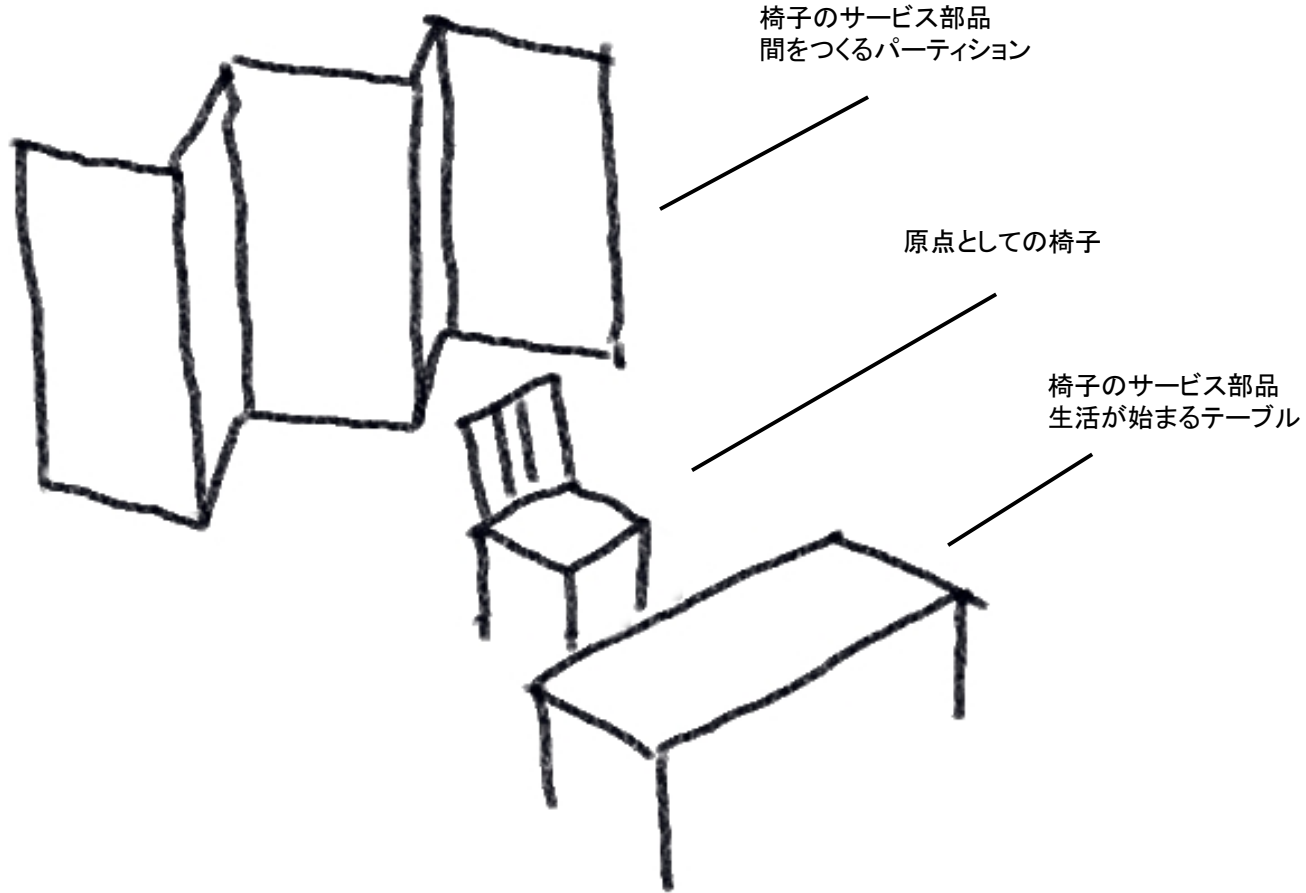


## 商品体系……補完し合う3つ

ネクストマルニは家具を次の三つの種類で考えています。椅子・テーブル・パーティションの三つです。この三つさえつくれば生活は始まるのです。

椅子は安心の拠点、テーブルは生活の拠点、パーティションは空間の間合いをつくる道具として「日本的文化がつくりあげる家具の三大要素」と考えます

ネクストマルニはなかでも椅子を最重視しています。椅子は家具の原点であり、生活の原点だと考えています。

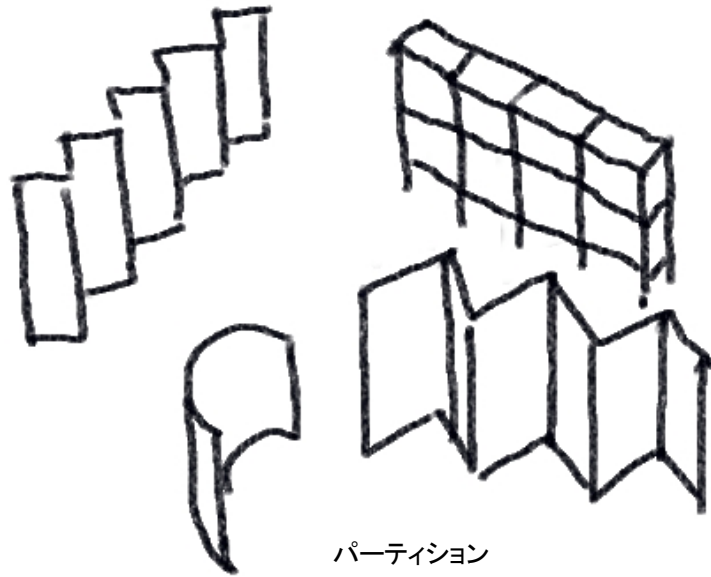


## コーディネート……異文化の調和

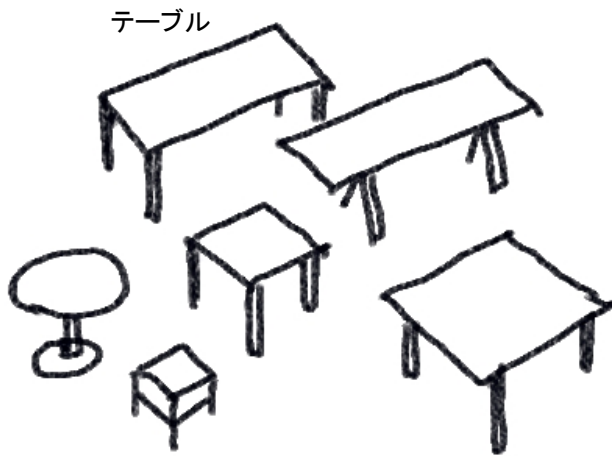
お仕着せの統一感だけを考えたインテリア・コーディネートを目指しません。1つのイメージをセットにした家具のシリーズを目指しません。椅子とテーブルとパーティションという三種類の家具はインテリアを構成する部品としてそれぞれが独立的にデザインされています。社会が全体の調和を優先して個人を規制したりしないようにインテリアの部品もそれぞれが独自の美を主張しています。調和とは個性を大切にこそ得られると考えています。



椅子



パーティション



テーブル

## 雑貨という海……家具を捨てて家具を探す

ネクストマルニは家具を捨てようと思っています。長い西洋の生活から生まれた家具というものを一旦捨てて、日本の空間と生活の思想から再出発して「日本発の家具の概念」を見つけていきたいと考えています。

雑貨とは領域の名称が固まらない物すべての総称です。雑とはすべてのジャンルで不確定で渾沌としたもののすべてを指していて、雑のつくものは渾沌の素晴らしいエネルギーを孕んでいます。その例をあげてみよう。

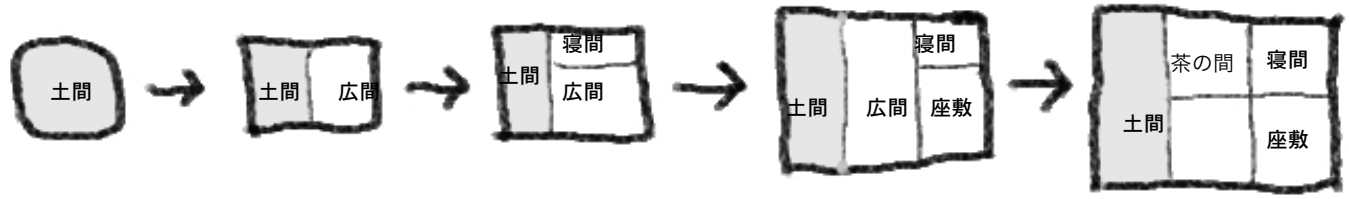
雑貨、雑魚、雑役、雑音、雑学、雑感、雑記、雑器、雑居、雑業、雑菌、雑具、雑技、雑劇、雑念、雑種、雑犬、雑言、雑誌、雑紙、雑事、雑色、雑食、雑色、雑説、雑草、雑則、雑多、雑役、雑用、雑体、雑類、雑著、雑体、雑肉、雑念、雑輩、雑費、雑筆、雑兵、雑品、雑物、雑文、雑報、雑木、雑本、雑務、雑用、雑話、雑録、雑歌、雑巾、雑炊、雑談、雑説、雑煮、雑人、雑筆、雑木、雑物、

雑という文化、それはエネルギーで多くの可能性のある文化です。ネクストマルニはここから始めます。

民家の発展の歴史を見ると土間だけの竪穴式住居から出発して板の間がうまれていくのです。はじめに寝間と広間が生まれ、座敷や茶の間が分裂していきます。そして、大切なことは、はじめから土間がずっと残されていることです。土間は農作業や様々な多様な作業を受け止める空間として残されているのです。

雑貨とは建築ではこの土間に相当します。そこから新しい領域がうまれていくのです。

この「雑」のつく言葉の渾沌さのなかに豊穰な海、生命の始まる海のような力を感じています。この中に生活のための道具を一旦戻して、改めて新しい家具の定義を探していこうと思います。



## 身体感覚……身体からの発想

日本の美意識は身体感覚からの美意識です。社会は他者への気づかいから始まり、他者や世間への義理や人情がつくりあげるものとして捉えられていますし、自然との一体感も死をも生の一部と考え、今の全てを仮と理解する自然の生々流転として身体で捉えています。ものづくりもできるだけそのままであろうとする、加工を嫌うのです。反物をできるだけ刻まないで縫製するのです。着物がほとんど同じかたちであることから分かるように日本の美意識は素材感を重視してその素材感を協調するための形でしかない。形は重視されてはいなかったのです。

ネクストマルニはその主要な素材を木材に制限しています。木のもつ魅力は熱伝導率が小さく、熱浸透率が低いことから分かるようにひとの肌に優しい素材です。

椅子を中心として商品体系を構成していることも、この身体感覚の重視につながっています。椅子、ここではベッドも含むのですが、椅子は家具のなかの衣服のように身体と直接接する唯一の家具です。

数奇屋は木と竹と土と紙でできていました。日本の気候風土に適した素材として日本の文化と一体となっていました。ネクストマルニは日本発の新しい家具の思想を開発し販売するブランドです。



# 6つの思想

## 1. 調和の思想

統一したインテリアを否定しはしないのですが、新しい調和の時代が来たと感じています。適度な統一感があっても、1つの価値観が支配する調和が美しいとしたらスタティックで発展性のない調和に違いありません。ネクストマルニが描く夢は個性的な人々が、個性的な夫々の文化が対話をしながら自ら探していく調和です。そこに生まれるのは渾沌のエネルギーがあり、高度な進化する調和です。ネクストマルニは異なる文化との対話を求め、夫々の個性的な作品がそれぞれの生活者によってコーディネートされていくそのような調和を夢見ています。

## 2. 原点回帰

ヨーロッパから持ち込んだ家具、歴史を持たない日本の家具を世界に向けて製品化することは巨大な歴史をもつ西欧諸国への不遜な姿勢だと思えます。謙虚に「日本の美意識へのメッセージ」を椅子の言葉で頂き、同時に家具という概念を捨てて日本の住いとそこでの作法から新しい家具の概念を再発見することに努めました。「未分化の雑貨の海」に戻し、そこから改めて家具を再発見しようとしたのです。発見したものは「椅子+テーブル+パーティション」という簡明な構成でした。新しい視線から見つけた、日本の思想から発見した生活を支える道具としての家具の発見です。

## 3. アイデンティティ

世界と共存する時代に生きています。国内だけにマーケットを求めていけばよかった20世紀の時代を過ぎて、これからは世界に主張し、世界と対話をしながら共存していく時代です。世界に誇る歴史と文化を持ちながら、近代化が西洋の価値観で進められた結果、日本はその文化を深化させながらも表面は西洋文化の奴隷のように日本の美意識を忘れていきます。ネクストマルニは世界に挑戦するために、改めて自分自身のなかに潜む日本の美意識を洗いだし、これからの商品開発の思想に、事業の思想に反映させていきます。

#### 4. 人と物の共存

20世紀を迎える頃から我々地球上には生活を豊かにするための物があふれるようになりました。

産業は物の生産によって活力を得ていますから、物の生産を否定することはできません。しかし、あふれる物は廃棄物となって地球の生態系を乱すだけではなく、多すぎる物が人を疎外して、物と人の共存さえ難しくしています。物を美しくすること、芸術性を復活させること、そして、人が物を愛することのできる時代をつくりあげることこそ大切になりました。フェティシズムは物への愛情をいいます。これからの時代はすべての物が愛情の対象となる、芸術性豊かな存在であるべきだと考えています。

#### 5. 身体感覚の復活

うまれて間もない幼児は、ほとんど動物的といえるほどに直感力を持っているそうです。嗅覚と触覚ですべてのまわりの世界を捉えているのです。20世紀の近代の時代に極端に肥大した知性によって、現代の人間はその動物的な本能を失いつつあるのです。ネクストマルニはすべての家具を木を用いていこうと考えています。素材は木のこだわり、触覚を大切にしていきます。思想も日本の美意識がそうであるように身体感覚から発想し、椅子の意味を発見していきます。商品を<椅子+テーブル+パーティション>という3つの要素に絞って考えること自体、身体感覚からの発想なのです。

#### 6. 思想を伝える

ネクストマルニはこのように、単に家具を売るのではなく、思想を伝えるために事業をしていきます。そのために、始めからネクストマルニを文化活動と経済活動の融合と位置づけしてきました。これからの時代は文化的であることこそ事業を成功に導き、経済性を十分に考慮してこそ文化的効果を生みだすことができるのです。事業が生きる喜びであること、生きる喜びがそのまま事業になっていることをネクストマルニは目指しています。この事業自体が我々の夢なのです。